
SHUEI

B A S E B A L L T E A M

2026



“未完の可能性を信じ”

強くなるために、私たちは挑戦し続けます。

答えは与えられるものではなく、
挑戦の先に自分たちの手で形にしていきます。

うまくいなくてもいい。失敗してもいい。
だからこそ、立ち止まらずに動き、
考え、挑み続けます。

失敗は、次の問いを生み出す大切なデータです。

勇気を出して踏み出した経験は、
必ず自分の財産になります。

楽な道や逃げ道は選びません。
自分で決めたことを、最後まで貫く。
その積み重ねが、
人としての強さになると信じています。

本気を伸ばし、エネルギーを止めない。
バイタリティあふれる仲間を待っています。

秀英高等学校硬式野球部
監督 佐々木勇人

大切にしている理念

“未完の設計図”

未完の設計図とは、はじめから答えを与えず、自ら考え挑戦し続けるチームを実現するために掲げた理念です。

失敗は学びに変えながら、一人ひとりが主体的に成長し、自分たちの手でチームをつくり上げていきます。

身につくチカラ

- **主体性**：自ら考え、選び、行動する力
- **挑戦力**：失敗を恐れず、一步を踏み出し続ける力
- **継続力**：自分で決めたことを、最後までやり抜く

・・・野球を超え、● **生きる力** ● になる

公式戦ユニフォーム



公式キャラクター



しゅうまん君

取り組みの様子



必勝祈願（伊勢山皇大神宮）



地域清掃（いずみ野周辺）



大谷学園対決（横浜隼人高校との交流戦）



翔英祭はオリジナルダンスで盛り上げる



対話を重視した技術指導（大会前の球場練習）



8年ぶりの校歌（2025年夏）

自主自律 自力貢献

- (1) 自らの意志で行動できること。
- (2) 自分を管理（コントロール）する力を身に付けること。
- (3) 自分の存在が世のため人のためになるよう貢献できる人格を形成すること



部室を綺麗に！！！！

（2023年12月）

長年使用し、汚れや落書きの多かった部室を自分たちの手でリノベーションしました！
（左）リノベ前（右）リノベ後

練習場所



秀英高校グラウンド(泉区)



瀬谷本郷球場(瀬谷区)

※週に2回程度使用

OUR HISTORY

野球部の歩み

- 1992年 創部
- 2023年 監督に佐々木が就任し、新チームがスタート
- 2024年 秋季地区予選で市立南高校を相手に延長11回タイブレークで勝利
単独チームを相手に、初めての公式戦勝利を飾る
- 2025年 第107回神奈川大会で港北高校に勝利し、8年ぶりに勝利の校歌を歌う
- 2026年 第108回神奈川大会で津久井高校に勝利し、史上初2年連続の初戦突破



新チーム初の対外試合(2023)

～ この先の歴史を、共に描こう ～



新体制で迎えた初めての夏(2024)

ACTIVITY CONTENTS

主な年間行事

- | | | | |
|----|----------------------------|-----|--------------------------------|
| 4月 | 入学式
春季地区予選/県大会 | 11月 | 横浜西部地区交流戦 |
| 5月 | 東北遠征(宿泊遠征) | 12月 | 冬季キャンプ(強化合宿)
年末休み |
| 6月 | 壮行会(夏の神奈川大会) | 1月 | 必勝祈願(伊勢山皇大神宮)
地域清掃/ボランティア活動 |
| 7月 | 三重遠征(宿泊遠征)
選手権大会(甲子園予選) | 2月 | 環境整備 |
| 8月 | 秋季地区予選 | 3月 | 卒業式・卒業を祝う会
練習試合解禁 |
| 9月 | 秋季県大会 | | |

※年間の対外試合数は約100試合(公式戦を含む)

※シーズンオフは野球以外の教育活動も盛んに行う



記録員としてベンチに入った秀英の蔵根美結マネジャー＝伊勢原

秀英初の女子部員

「部に貢献したい」

蔵根美結マネジャー

秀英のベンチに記録員として入った1年生マネジャーの蔵根美結さん(15)は、同校野球部初の女子部員。今春、学校が男女共学となり、女子生徒でただ一人、入部した。

中学時代はソフトテニス部員だったが、高校にはテニス部がなく、各部を回る中で「野球部がすごく活気があり、ここで自分も貢献したいと

思った」という。

野球の知識はほぼゼロ。プロ野球を見ることもほとんどなかった。監督や選手からスコアの書き方を習い、家でもネットで調べて独学した。練習中、つらそうな選手を見かけると、積極的に声をかけるよう心がけた。

この日も、試合前の緊張でカチカチだった選手たちに自分から話しかけていった。残念ながらコールドで敗れたが、「来年は必ず勝てるはず。それまでベンチワークなど、自分にできることをやっていきたい」。今は野球部が「とても楽しい」と笑顔で話した。(中島秀憲)

わが人生

50



2017年夏の県大会での本田仁海(左)田島大輔(右)のバッテリー

現在、私由由を支援してくれている高橋航平コーチ(左)と右寺悠城コーチ(2024年、横浜スタジアム)



星槎国際高校湘南野球部監督

土屋 恵三郎

星槎からプロ入り第1号となった本田仁海(オリックス)が大きく成長したのは1年生の冬だ。野球を始めた小学生の頃からスリークォーターで投げていたがシャドーヒッチングを繰り返してチェックすると、腕の振りと腰の回転がちゃんと合った。私の提案でオーバースローをシャドーで試してみた。意外とスムーズで、次は実際に球を投げてみた。今までにない、ピュンと鋭くて強い球になった。彼は未知の世界に一歩踏み入れたような、あっけにとられた表情をしたが、何かをつかんだようだった。

本田成長の立て役者

2016年春、2年になった本田にエースナンバーを与えた。夏の県大会には、創部初の4回戦進出、秋はベスト8進出に貢献した。さらに春の県大会準々決勝では慶応を3-1で下し、「星槎に本田あり」を印象づけた。少年野球でエースになれず、中学校も県大会

1回戦で負けただけの普通の野球少年が、プロの視線を集めるまでになった。ただ、ここに至るまでは、精神面でやや不安のある本田を支えた、チームメイト田島大輔は語れない。まず、捕手の田島大輔(桜美林大)エイシヤック。浮き沈みがあり、サポート

せのある本田を励まし、しっかり育てた。プロ入りが決まった後も、ジムなどでトレーニングに付き合っていた。「名投手の陰には名捕手あり」を地でいく、名捕手「あつた」。本田が2年の時の主将小真裕真は、岩倉(東京)から転入してきた。転校生が

主将を任されるのは珍しいが、みんなに慕われた。本田の面倒をよく見ていた。残念ながら、彼は不慮の事故でなくなった。「成人式のあいさつに行く」と私に連絡をくれたのに、川崎市川崎区で、知人のためにタクシーを拾おうとして、飲酒運転の車にはねられた本田に、ぎりぎり作ったことも。そのかいあってか、本田は身長が65センチ増え、17年、本田の最後の夏は、第1シードを獲得。春の大会で大敗した横浜打倒に臨んだが、日大に4-9で敗れ、5回戦で敗退した。「悔しくて仕方がない」と話した本田に、成長を見た。

は「何で、意識レベルの低い人たちと、一緒に野球をしなければならぬのか」と私に食ってかかったが、実際の行動はまさに「星槎の力カギ」。レギュラーの座を1年生に抜かれても、チームをまとめてくれた。忘れてならないのは、彼らと寝食を共にし、厳しくも優しく寄り添い続けた当時のコーチ、佐々木勇人(現・秀英監督)だ。小食だった本田に、ぎりぎり作った

攻守でチームを引っ張った秀英の主将渋谷桜

横浜商高グラウンド



攻め貫き乱打戦制す

弱 ①：乱打戦

を制した秀英の主将渋谷桜は「徐々にほぐれて攻撃的な野球ができた」と四、五回の連続4得点を誇った。主将自身は4安打2打点、続く風間も3安打4打

覚悟で」と決意を口にした。

杉田が雪辱アーチ

Y ②：横浜商

(Y校)は8番の杉田が本塁打を含む3安打6打点と活躍し、投げては先発山口ら3人で奪封した。

武相に逆転コールド負けを喫した昨秋の県大会の反省から「冷静に次につなぐ気持ちで」と杉田。低い打球を意識した初回に二塁打で手応えをつかみ、左越えのアーチも描いた。

同じ公立校として選抜出場した横浜清陵の姿も原動力だ。主将松本は「誇らしい気持ちで見届けた。自分たちがあそこに立てなかった悔しさで頑張ってきたので、気持ちを全力でぶつけ」と意気込んだ。

点と中軸がリードしてチーム13得点。強豪校に大差で敗れる試合を多く経験し投手を援護できる、追加点を挙げられる野球を「渋谷桜」と攻めの姿勢を貫いた。23日に横浜商(Y校)との決戦を控え、負ける気持ちは一切ない。県大会を決める

第3種郵便物認可

秀英 8年ぶり白星

秀英が、2017年以来となる夏1勝を飾った。投手リレーした2年生エース関田と背番号10の3年生長谷川の2人が、互いが招いたピンチをカバーし合い、勝利をつかみ取った。長谷川は「3年間取り組んできたことが開運っていなかった」と、喜びをかみしめた。

それぞれが持ち味を出し、自分の役割を全うする気持ちが勝利をたぐ

秀英7-5 港北



●2回1安打3失点（自責点2）だった秀英の関田
 ◎7回9安打2失点だった秀英の長谷川
 =ハマヤク（石井 啓祐写す）

勝機呼ぶ継投

「全員で」互いに支え

リ寄せた。先発した関田が、先制した後の二回に3失点。2死一、二塁の場面で「後輩がつくったピンチは3年生が抑えてあげないと」と、左腕長谷川がマウンドに上がる。代わりはな、左前打を許すも、三回以降はコーナーを丁寧に突き、スコア

ボードにゼロを並べた。四回には主将長谷川と同点満塁打などで逆転すると、7-5で九回へ。長谷川がテンポよく2死を取ると連打で2死二、三塁とされ、ここで関田が再びマウンドに。「打点満塁の窮地で、高々と上がった打球が遊撃手

のクラブに収まると、歓喜に包まれた。

関田から「投手陣のお兄ちゃん的存在」と慕われる長谷川は、最後を締めた関田に感謝し「この代で1勝できて本当に良かった」と目に涙を浮かべた。長谷川は「誰かのミスは誰かがカバーする意識で1年間取り組んできた。一戦必勝で次も全員で勝ちにいきたい」と次戦を見据えた。

（阿部 幸康）

